

遺品が殆んど漏れなく掲げられて居て、而もうちに從來全く利用し得なかつた重要なものが公開せられるに至つたことから、この書に依つて支那の史前研究に一つの新しい基準が示されたとも云ひ得ると思ふ。なほ本文の記述にあつても、その結構は大體 Children of the Yellow Earth に似てはゐるが、確實な實測圖を挿んで記述が適確の度を加へた點をも擧ぐ可きであり、更に爾後の支那考古學の進運に伴ひ教授が隨所に既往の所見を再檢討の上見解を新たにしてゐる點が注意される。その意味からすると本書は教授の調査を通じての現時の支那史前文化の概観とも云ふべき面を持つたものとせられる。教授が最初の河南仰韶の發掘に於いてなほ適確にその特色を把握するに至らなかつた同地出土の黑陶をばその後の知見に依つて明確にしてゐることや、爾後の中國學者なり日本學徒の滿蒙に於ける業績をば自己の發見品と結びつけて年代觀なりその他の性質を論じてゐる點などは、右の一部分として是等の上にいるくゝと新しい見解が認められるのである。この點は教授の最初の所見がそのまゝ、殆んど無批判に受け容れられて現在なほ一般に行はれてゐる我が學界の舊態依然たるに對し、深き反省と共に特に本書の通讀が要請せられる次第である。

たゞ左様な記述の間にあつて博士が當初提出せられた甘肅の出土品を中心とする所謂史前文物の六期説に對しては、それが極めて不十分な基準の上に立つ所から學界の一部に批判が現はれてゐるにもかゝはらず、どうした事か何等の再檢討を加へることなく、恰も既定の事實の如く取扱はれてゐるのは、記述を通じて新たに

右の組立ての上に地理的な背景の考慮せられてゐることが推される所はあるとは云ひ乍ら、異様に感ぜられる所である。それは兎も角として東亞の天地に幾年振りにか再び平和の訪れた今日、この書はまさに再出發するであらう支那中原の古文化研究の新たな目安を與へるものとして、所掲の遺物類の眞の姿の把握の行はるべきことに期待がかけられるのである。(丸善取次發賣、價瑞典六十クラウン)(梅原末治)

彙報

史學科新學期の講義

終戦に伴ふ勤勞動員學生の復歸、出陣學徒の復員に依り十月十日から新學期の講義が開始せられた。明年三月までの講義の題目は次の如くである。

國	史	西田教授	中村助教	西田教授	中村助教	藤助教	柴田講師	東伏見講師	赤松講師
		○國史概説 第一部 每週 二	○國史概説 第二部 每週 二	○國史概説 第二部 每週 二	○國史概説 第二部 每週 二	○國史概説 第二部 每週 二	○國史概説 第二部 每週 二	○國史概説 第二部 每週 二	○國史概説 第二部 每週 二
				(演習)平安時代の文化とその後代への影響 一	(演習)平安時代の文化とその後代への影響 一	(演習)平安時代の文化とその後代への影響 一	(演習)平安時代の文化とその後代への影響 一	(演習)平安時代の文化とその後代への影響 一	(演習)平安時代の文化とその後代への影響 一
				日本古文書學 一	日本古文書學 一	日本古文書學 一	日本古文書學 一	日本古文書學 一	日本古文書學 一
				中世の社會・文化 二	中世の社會・文化 二	中世の社會・文化 二	中世の社會・文化 二	中世の社會・文化 二	中世の社會・文化 二
				(實習)時代精神と歴史意識 二	(實習)時代精神と歴史意識 二	(實習)時代精神と歴史意識 二	(實習)時代精神と歴史意識 二	(實習)時代精神と歴史意識 二	(實習)時代精神と歴史意識 二
				近世の社會とその思想 二	近世の社會とその思想 二	近世の社會とその思想 二	近世の社會とその思想 二	近世の社會とその思想 二	近世の社會とその思想 二
				飛鳥奈良時代の研究 二	飛鳥奈良時代の研究 二	飛鳥奈良時代の研究 二	飛鳥奈良時代の研究 二	飛鳥奈良時代の研究 二	飛鳥奈良時代の研究 二
				中世史料の研究 二	中世史料の研究 二	中世史料の研究 二	中世史料の研究 二	中世史料の研究 二	中世史料の研究 二

東洋史

那波教授	○東洋史概説 第一部	二
宮崎教授	○東洋史概説 第二部	二
那波教授	唐代の社會	二
宮崎教授	(演習)唐代民間文書	二
田村助教	支那政治思想	二
外山講師	(講讀)歷代食貨志	二
愛宕講師	漢民族の南方發展史	二
	(講讀)二十二史劄記	二
	太平天國の研究	二
	蒙古史	二

西洋史

原 教授	○西洋史概説	二
鈴木助教	ギリシヤに於ける政治思想	二
井上助教	(演習)近代に於ける政治と	二
前川講師	經濟との關係	二
	主従關係の研究	二
	ローマ商工業史	二
	フランス革命史の研究	二

地理學

小牧教授	○地理學概説 第一部	二
野滿講師	○地理學概説 第二部	二
小牧教授	島の人文地理	二
室賀助教	(演習)地理學の諸問題	二
	政治地理	二
	(講讀)フランス地理書講讀	二

野間講師	(實習)	二
梅原教授	(講讀)アメリカ地理書講讀	二
	○考古學概説	三
	東亞古墳墓の研究	二
	實習	三

村田講師	エーゲ文明よりギリシヤ文明へ	二
史 學	村田講師	一
研究法	原 教授	一
	○史學研究法	一

國史研究室近況

讀史會 終戦に伴つて出陣學徒の復歸する者相踵いで來り、國史研究室もこれらの學生を迎へることになつたので、その歡迎と慰勞とを兼ねて、十日十九日(金)午前十時半から大徳寺山内大仙院に讀史會を開いた。西田教授以下教職員、卒業生、學生等の會する者四十餘名、名園に臨み、堀内副手の點前にて茶を喫し、新なる歴史の創造に就いて眞摯なる意見を交換した。

次いで十一月廿三日(金)には同じく大徳寺山内龍光院、芳春院に於いて、讀史會大會を開いた。先づ午前中は赤松講師の指導の下に龍光院名寶の展覧を行った。小堀遠州好みの密庵床には大燈國師墨蹟法語を掲げ、その他江月宗玩、玉室宗珀、澤庵宗彭らの墨蹟、狩野探幽筆大燈國師像、四季山水等、松花堂昭乘の碣石巖圖等數々の名品に接するを得た。會食の後、芳春院に於いては西田教授、藤助教より左記の講演があり、國史研究の動向につき

力強い指示と激励とがあり、引續いて懇談會には現實に對する深い反省と鋭い批判が行はれ、活潑な意見の交換ののち、初冬の暮易い六時過ぎに漸く解散した。

武家社會における合理的精神について

藤 直幹氏
西田直二郎氏

國史研究の方向

國史研究叢談話會

その後次の如く開かれた。

八月廿二日 「萬川集海」紹介

藤 直幹氏

八月廿九日 石田梅巖の著書に就いて

柴田 實氏

十月十日 慈鎮關係史料紹介

赤松 俊秀氏

十月廿四日 丹波馬路郷土史料紹介

平山敏治郎氏

十一月廿八日 細川幽齋自筆紀行記紹介

平山敏治郎氏

西田教授進駐軍への講演 京都國際文化協力會の主催による日本文化講演——特に第六軍に對する——の第一回として、西田教授は十一月十一日(月)午後二時より同志社本部講堂にて、駐京都第六軍幹部約五十名に對して日本文化の歴史的發展の様相を説き

その該博透徹の意見により豫期の如く多大な感銘を與へて成功裡に終了した。更に十一月廿六日(月)の夜は特に大阪瓦斯ビルに於いて同様の講演が試みられ、これ亦該部隊幹部に對し日本文化理解に多大な示唆を與へた。

東洋史事攻新入學生並びに復員學生を迎へて十一月七日正午より研究室に開催。出席者は宮崎教授、藤原助手、笹本、厚地兩副

手、學生約十名。各自辨當持參で會食の後、笹本談話會學士委員の挨拶並びに談話會についての説明あり、歡談。宮崎教授より學生に對し、研究上その他種々有益なるお話があり、二時過に散會した。

東方文化研究所開所記念行事

東方文化研究所では例年通り十一月九日、開所記念式典を行ひ續いて記念行事として左の次第にて五日に亙る支那文化講座を開催、別に記念日當日同所書庫を開放、正史の展覧を行った。

東洋史談話會

東洋史讀書會大會

第十三回西洋史讀書會大會は、例年の如く十一月三日の明治節に開催された。樂友會館が進駐軍に接收された爲俄に會場を文學

部第七教室に變更する等の終戦異變はあつたが、兎に角、戦時戦後を通じて大會の舉行を一回も欠かさなかつた事は、我々の最も喜びとする所である。

當日正午から文學科閱覽室で各自辨當持參の上晝食を共にしつゝ、原教授を中心に歡談の一刻を過し、次いで一時から講演に移つた。

先づ原教授起つて、挨拶に代へ「アリストテレスの理想國に就いて」なる演題の下に熱辯を振はれ（本講演は追つて本誌に掲載の豫定である）、次いで前川、中山、井上、鈴木四氏の研究發表があつた。本年は交通難の爲他學からの參加を得なかつたが、聴講者は百餘名に達して廣い第七教室に溢れ、近來稀に見る盛況を呈した事は、學問特に西洋文化理解への一般人士の熱意を示す喜ぶ可き傾向と云へよう。講演の内容梗概は次の如くである。

一、強國と國際平和機構

前川貞次郎

（近く發表豫定につき梗概省略）

一、ロシア史に關する一二の問題

中山治一

十九世紀末にフランスの歴史家ルロワ・ポーリュウは、「ロシアとは何ぞや、それはヨーロッパであるのか、それともアジアなのか。ロシア史の研究者は常に此の問ひに直面せしめられる」と云つてゐるが、今日ロシア史研究も残念ながら此の問ひに明確な解答を與へ得てゐない。

大體、従来のロシア史研究は十九世紀ヨーロッパ史學と同じ理由で、同じ頃に、同様な過程を以つて發達し來つたものである。

勿論このこと自身は、近世ロシアといふもの本質より見て、決して偶然ではなかつたのであるが、然しいづれにしても從來のすべてのロシア史研究が所謂ヨーロッパ史學の枠内に在るものであつたことは明らかである。そこで後者に固有な限界性が、同時に前者にもまた内在してゐたと云はねばならない。つまり、ヨーロッパ的觀點に立ちヨーロッパ的尺度に準じてロシア史を捉へようとしたところに、從來のロシア史研究の特色なり誤謬なりがあつたと云へるのである。

ところで、從來のヨーロッパ史學は、ヨーロッパといふもの本質の然らしめるところであるが、地域性の捨象・地域性無視の歴史把握を以つて特色とする。從來のロシア史研究は、カラムジンよりポクロフスキーに至るまで、すべて斯くの如きヨーロッパ史學の觀點よりしてロシア史を把握せんとしてゐたのであるが、之に對して最近ロシア史をば一つの地域的單位・地域單一體の歴史として捉へようとする新しい立場が起つて來た。既に早くロス・トフツエフは「ロシア史はスラヴ民族の歴史ではなくロシア國の歴史でなければならぬ」と云つてゐるが、最近ヴェルナドスキ一等の代表する所謂「ユーラシア學派」は、明瞭に意識的にヨーロッパとアジアとの中間に介在する第三の地域單一體の歴史としてのロシア史なるものを構想してゐる。

然しながら、「ユーラシア學派」の歴史敘述は、その思想的祖先たる十九世紀の「スラヴ國粹主義」のロシア史觀と同じく、決して歴史事實から出發した具體的實證的研究の成果なのではなく、

むしる先驗的・圖式的演繹の論述にすぎない。例へば我々は、ヴェルナドスキーの著作に見られる数々の破綻を指摘することが出来る。

結局我々は、それぞれの時代によつて異なるロシアの特異な姿を具體的即事實的に實證すべきであらう。即ち、或る時代にはヨーロッパの部分として、また或る時代には所謂「ユーラシア」として歴史を展開したロシアの各時代的な特殊相をば史實の中に深索すること、之が今日我々の課題でなければならぬであらう。

ローマ的自由觀念の性格 井上智勇

ローマ精神をギリヤ精神に對比してその特質を考へると、後者が理性的究極原理として眞善美の絶対價値を仰ぎみるのに對して、前者は常に生活を直接に指導する實用價値を評價する。ギリヤ精神の展開がむしる現實から遊離して思想的發展の形態を取るに對して、ローマ精神は事實の中に顯現した。前者は思想の體系を作つたが後者は事實を通してのみ自己を呈示した。ローマ精神はかくて思想家の思想としてでなくて實踐生活の格律としての「法」の中に、又對外發展の實踐理性として自己を歴史化した。かかるローマ精神の核心をなした一要素が「自由」の觀念であつたのである。王政から共和制への轉換、共和時代に成立した諸法規の内容、プリンチパートといふ特殊な政治形態等に於いて、吾々はローマに於ける自由愛好の精神が如何に一貫してローマ人を指導したかを見る。一見物欲といふ形而下的誘惑によつてのみ行はれた

如くみられるローマの世界擴大も、實は非自由的諸民族に「自由を附與せん」とするローマ人の世界史的使命の自覺に基礎づけられてゐるのである。所でローマ的自由は、固定化した概念でなく、それぞれの歴史的環境をつき破つてその内容を擴大して行つた事實が示すやうに、ローマ史を貫通する歴史的な *Drang* であつた。併しそれは *the "old" Bonaventura* といふ個人の絶対的自由を認めるギリヤの無限的自由ではない。飽く迄も法として國家的意志の形成に實現されることを窮極とする。つまりローマ人にとつて、自由の實現は、それぞれの歴史的環境に於いて國家生活への参加を確保擴大することに他ならなかつた。國民は自ら國家を規定しその國家によつて自らを規定した。この國民と國家との相互規定がローマ的自由の限界をなしたのである。

中世都市の人口について 鈴木成高

中世は都市の高度に發達した時代として有名であるが、特にそれが大都市としてでなく小都市型において極度に發達したといふ意味でヘレニズム都市や近代都市の如き大都市型とは全然異つた性格を有することは周知のところである。そしてそれが小都市であるといふことは、經濟上における封鎖的自給單位たることと一致するもので、中世の如き局地的アウタルキー體制の下においては都市の人口は一定の限度以上に膨張し得ない制約性を有するものと考へられてゐた。此の人口の點については既に前世紀において研究が重ねられ、特に世紀末から世紀初の頃にかけて一應の完

成状態に達したとみられるが、唯統計的資料の缺如してゐるところから、單に理論的推定に基く推定の人口研究は問もなく方法上の限界に達して停頓状態に入つた。唯その間從來の研究においても、推定數字の修正が常に大數の方向に向つてでなく少數の方向に向つてなされて来たといふ一貫せる傾向の看取されることは注目すべき點である。殊に最近に至つてベヒテルの如く此の少數評價をば更に極度にまで進めんとする見解が登場し、而も此の如き過小性の故に中世都市は却つてアウタルキの單位たり得ざるものであり、遠距離商業の流通網の上に立つてこそ始めて存立し得るものであると考へられるに至り、ロエーリツビその他の遠距離通商論との一致點が見出されるに至つたことは甚だ興味が深い。

即ち中世の經濟體制の本位に關する見解の推移に伴ひ、一時停頓に陥つてゐた人口研究がその方法的制約にも拘はらず、今日再び放置する能はざる問題性を構成し來つたことは注目せらるべきであらう。

地理學談話會

卒業生豫饒會 本年度の地理學專攻卒業生五名に對する豫饒會は九月二十一日(金)午前十一時より地理學實習室に於て開催。小牧教授、野間講師、岡本助手の外、先輩として珍らしくも第一回卒業生の寺田氏、第二回卒業生の中野氏が見え、その他辻田、村上、三上の諸氏及び學生四名參集。時節柄とて各自持參の辨當を開いて會食し、午後四時頃まで歡談を續けた。

考古學教室近況

考古學談話會 八月十一日(土)午後二時卒より教室に於いて開催、梅原教授・村田講師以下大學院學生五名出席、松田一政氏の「ソ聯の舊石器時代に就いて」なる講演を聴く。講演は同國物質文化學院刊行の報告書を要約の上、兼ねて他の文獻を參照して現在の知見を示した有益なものであつた。講演後梅原教授から本學部初期の模様なり諸教官の指導に就いての回顧談があり、持ち寄りの茶菓を喫して五時過ぎ散會した。

復員教室關係者慰勞考古學談話會 角田副手を除く應召入團の教室關係諸氏の復員が割合に早く順調に行はれたので、是等諸氏を慰安の上新しい發足を期する爲の談話會を十月十八日(木)正午から教室で催した。出席者は復員的小林助手・藤岡囑託・樋口・横田・毛利(以上大學院學生)芹原・藤澤・横山・椅崎(以上專攻學生)の諸君をはじめ、梅原教授・田村助教・村田講師以下すべて十七名で近頃稀に見る盛會であつた。一同食事を共にしてから教授の挨拶にはじまり順次自己紹介をしながら體驗や將來の希望を開陳、それについて一々教授の補足があり、更に最近の情報に基く終戦後に於ける朝鮮の古蹟調査なり博物館の實情の紹介などあつて、會は有意義に進められ、有志の提供に係る果物・菓子などに満腹して四時過ぎ散會した。

學生の實地指導 十月廿八日(日)西宮史談會の催で大和丹波市の天理圖書館で同館新收の故保井芳太郎氏蒐集古瓦の見學會が行

はれた。致室關係員はこの機會を利用して同日午前十時同館に集合、右の會に合流の上梅原教授の説明の下に多數の實物を見學、十一時からは同教授の「古瓦に就いて」なる講演を聴いた。而して午後は快晴を利用してその東道の下に石上八分山、同大塚古墳等丹波市近郊の重要な遺跡を踏査したのであつた。

大學院學生の會合と譚讀

終戦に伴ふ致室關係者の復員に伴ふ處置として、新學期から所定の譚讀の外に梅原教授指導の下に次の諸會合を行ふことになつて十一月中旬から開始した。

- 一、大學院學生研究會 毎週一回木曜日午後一時—三時
- 一、有志の歴史考古學研究會 同上木曜日午後三時—五時
- 一、學生の譚讀 毎週一回月曜日午後一時—三時、テキストは Casson : Progress of Archaeology (London, 1934)

なほ村田講師の獨逸書譚讀も近く行はれる豫定である。

梅原教授の各地史蹟調査

九月廿二・廿三の兩日伊賀上野市に出張、村治圓治郎・岡田榮吉兩氏の協力を得て、同地三田廢寺址と其の出土品を精査する所があつた。次に十一月廿三日から廿八日に互る期間鳥取縣下に出掛けて、西伯那賀野・同宇田川村福岡・東伯郡浦安町齋尾・因幡土師百井等のそれ／＼の廢寺址に就いて調査する所があり新資料を蒐集した。

小會

本年は終戦直後の事でもあり、諸準備も意に任せぬので、例年の如き大會は取止め、小會としてさ／＼やかながらも、意義あらしめる事とし、十一月十八日、南禪寺本坊に於て、左の如く見學並びに講演會を開催した。折柄、紅葉に金山錦繡の如く豫想以上に多數會員の參會を得て盛會であつた。

庭園

- 一、見學 午前十時半より正午迄、南禪寺所藏古文書類及び
- 一、講演會 午後一時より
- 一、調和に就いて 原 隨 園氏
- 一、支那研究に就いて 那波 利貞氏
- 一、土屋文書に就いて 西田直二郎氏

(土屋文書の展覽と説明を併せ行ふ)

なほ別に本撰出身會員の寺内正因庵住持會員櫻井景雄氏よりも南禪寺に就いて解説があつた。